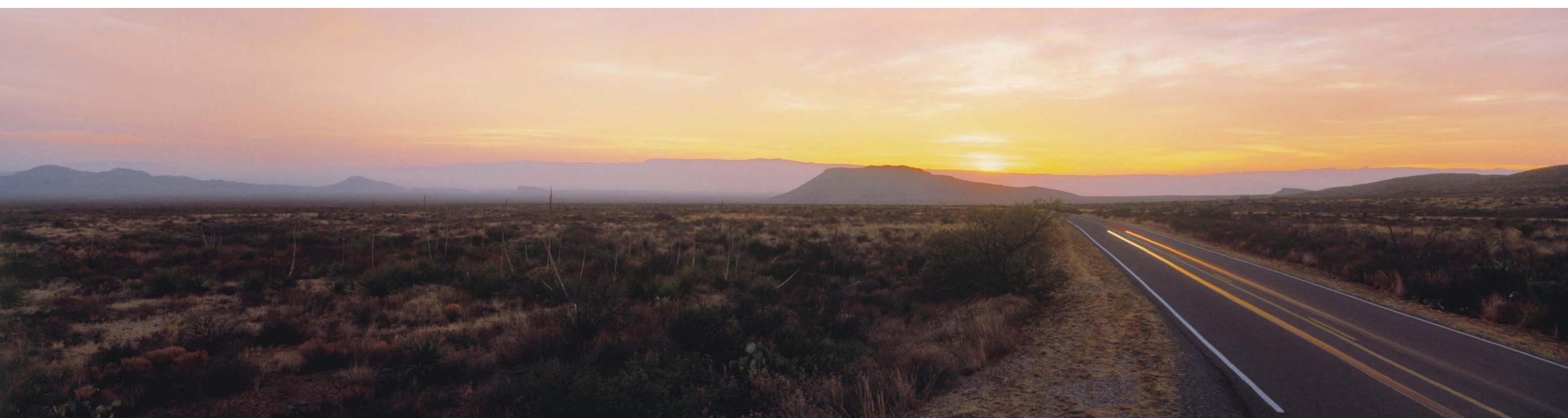


—お客様満足と信頼に生きる—

# 誠意と努力で築き上げてきた 100年の足跡

塩谷運輸建設 激動の100年史



## 社章の由来

片仮名の「ヲ」4つで「シヲ」、すなわち塩谷の「塩」を表しています。中央の「H」は創業者「範次」および初代社長「宏」の頭文字です。



## 人力車マークの由来

物流部門のシンボルマークです。お預かりした貨物は、常に「人を運ぶように真心こめて大切にお届けする」という思いを表現したものです。

# 北海道岩見沢の農場開拓工事に参画

—— 1913(大正2)年



当時の作業着姿(写真は塩谷範次の縁戚 内藤友次)

札幌の東北部にあたる岩見沢の開拓が始まったのは、1873(明治6)年頃とされている。当初は炭鉱の開発が目的であったが、1897(明治30)年前後からは農地づくりが盛んになり、やがて伊保村を発祥の地とする伊藤財閥もその将来性に着目して農場開拓に乗り出した。開拓工事が始まった1913(大正2)年、同郷の伊藤家の要請をうけてこれに参画したのが塩谷範次である。土木機械など一切ない当時の動力源といえば馬(どさん子)があるのみ。原生林が鬱蒼と茂る厳寒の地での工事は難渋を極めたが、範次は数々の苦難を克服して難工事をやり遂げ、土建業としての第一歩を踏み出した。



創業者 塩谷 範次



どさん子を駆って伊藤農場開拓に取り組む北海道岩見沢大願の原野

# 伊保村梅井に初の事務所を開設

—— 1933(昭和8)年

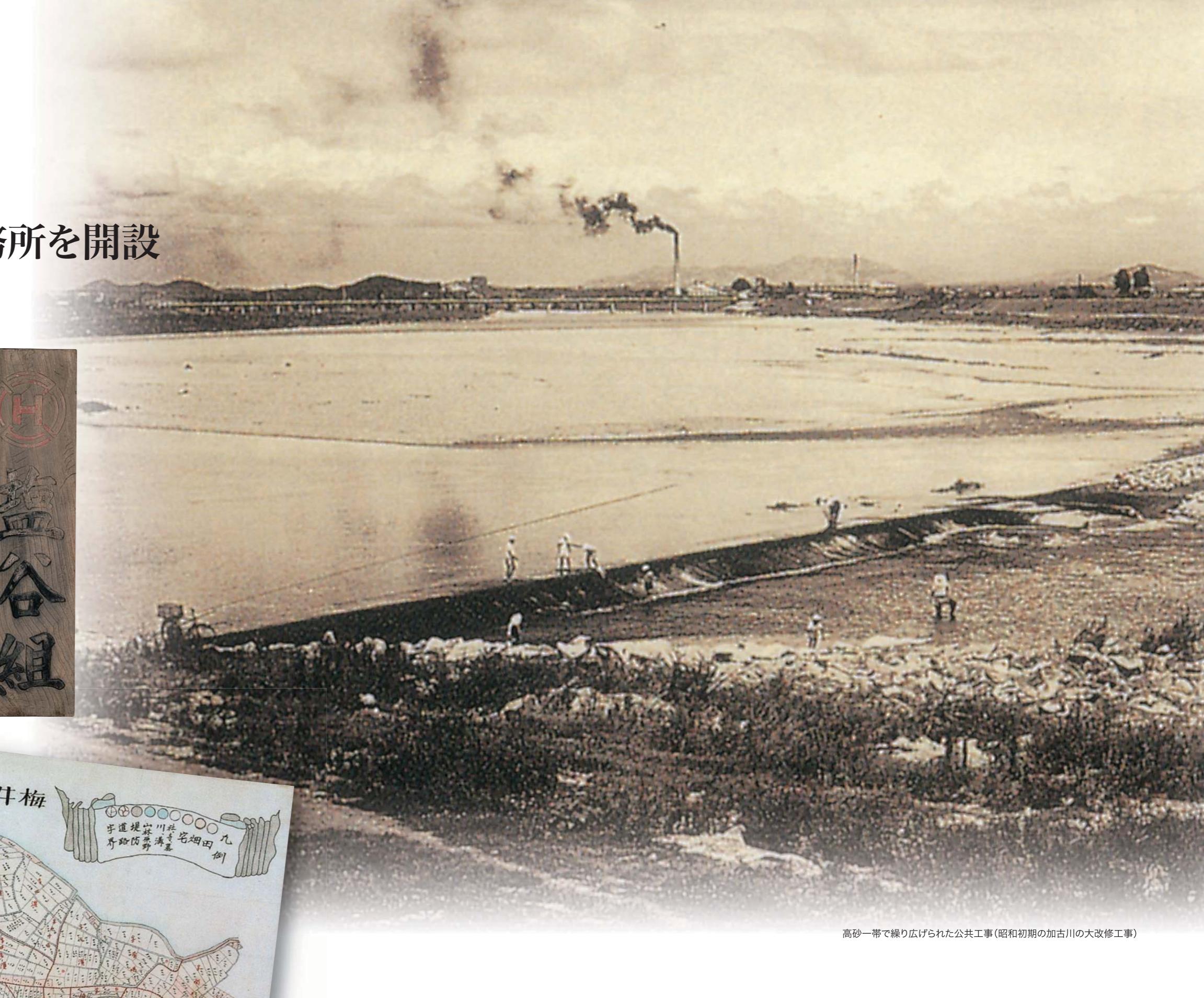
明治末期から昭和初期にかけて、現在の高砂市域一帯では鉄道の敷設、港湾の拡張・整備、臨海部の埋立工事といった大型プロジェクトが着々と進められ、とりわけ伊保村は工場地帯として著しい発展を見せていました。北海道での工事を終えて地元に帰った塩谷範次は、印南郡伊保村梅井669の自宅に事務所を構えて「塩谷組」の看板を掲げ、同地区における呉羽紡績株(現 東洋紡績株)の工場建設用地の埋立工事を手始めに、土木工事および運送港湾荷役業としての本格的な取り組みを開始した。1日の仕事を終えると、自宅横を流れる小川で馬車や牛車を洗ったというエピソードが今に伝えられている。



塩谷組の看板(創業当時)



元 梅井村全図



高砂一帯で繰り広げられた公共工事(昭和初期の加古川の大改修工事)

1937(昭和12)年5月8日付の当時の日刊新聞『神戸又新日報』に、「印南郡伊保村に日本一の優秀な板硝子工場」という見出しが躍った。当時、高品質な板硝子はほとんどドイツからの輸入品が占めていたが、それをしのぐほどの品質を誇る板硝子工場の建設を、昭和人絹株(後の吳羽紡績株)が兵庫県に申請したとの報道である。同年6月、昭和人絹株と株鈴木商店(現味の素株)が中心となって昭和板硝子株を設立し、伊保村に敷地面積6,700坪(22,110m<sup>2</sup>)年産20万箱の生産能力を持つ硝子工場を建設した。同年11月に板硝子の製造を開始、続いて12月には耐火レンガの製造を開始するとともに、昭和化学工業株と社名変更した。

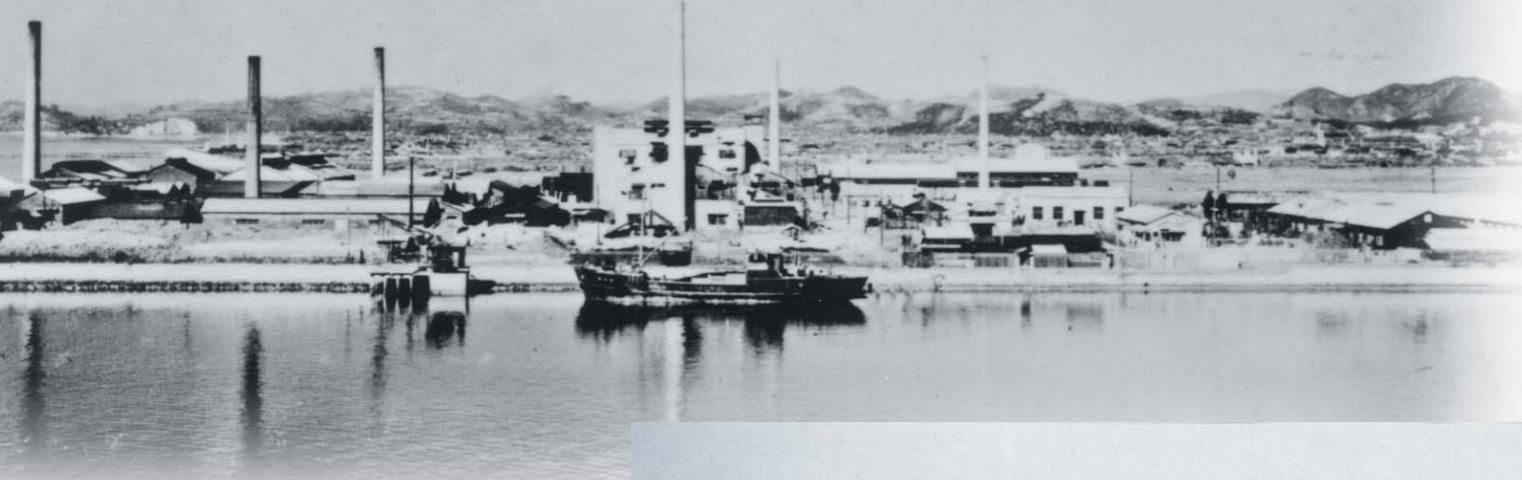


すでに大手企業の名も見える高砂町全図(大正9年頃)

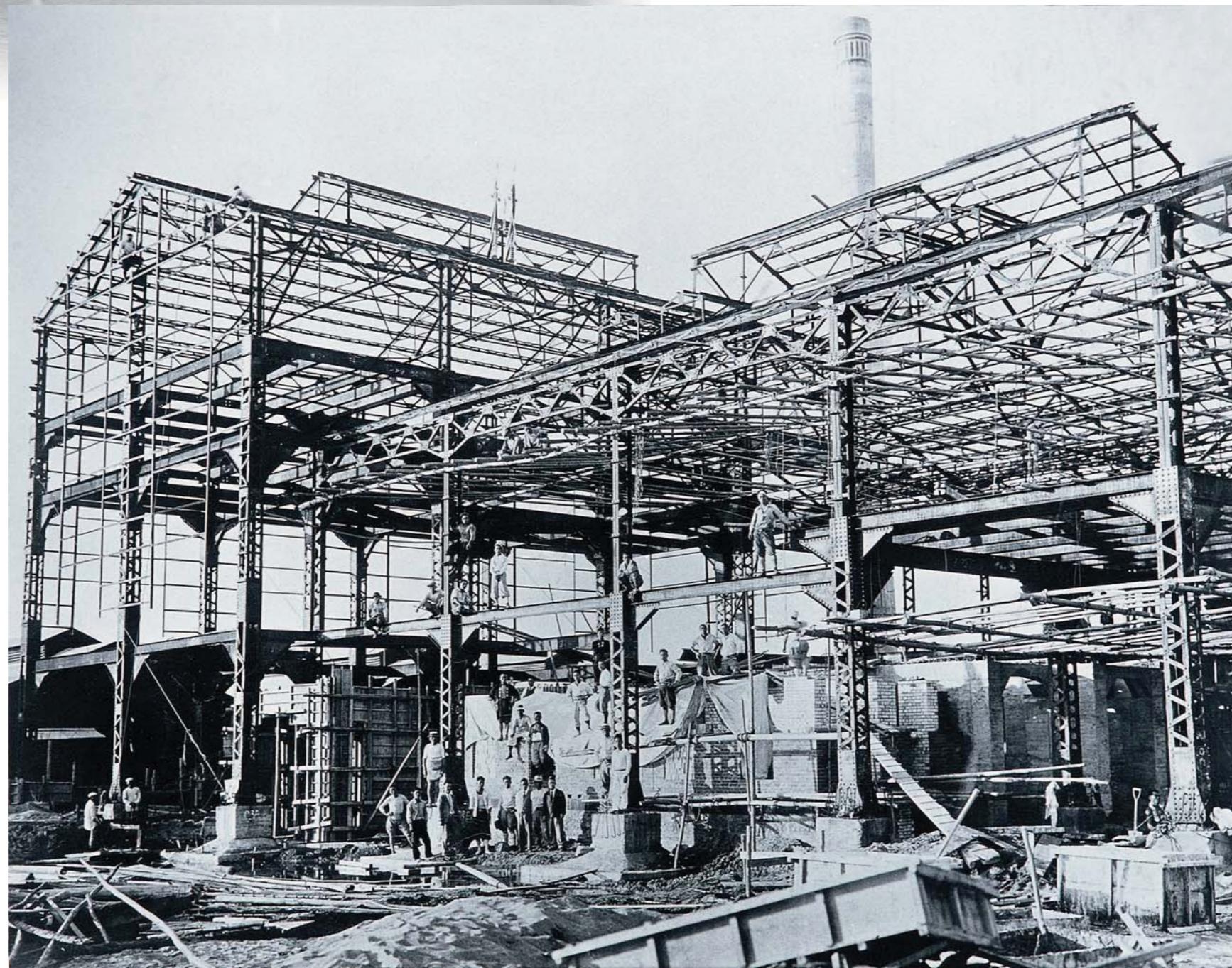
伊保村への近代的な板硝子工場進出を伝える日刊新聞「神戸又新日報」(昭和12年)

# 伊保村に近代的な板硝子工場が完成

— 1937(昭和12)年



旭硝子株伊保工場(昭和14年)

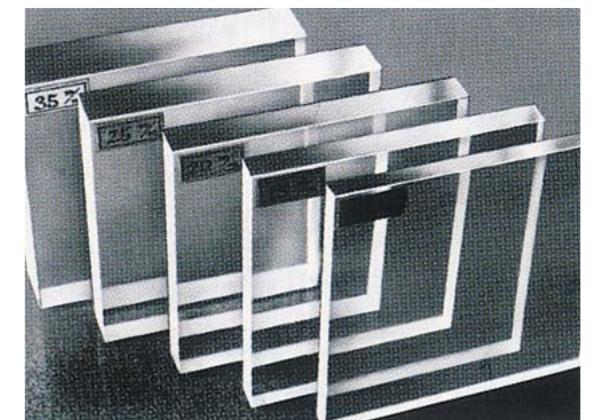


重機の姿が見えず人力が頼りだった工場建設風景(昭和10年代)

## 旭硝子株式会社との取引を開始

—— 1939(昭和14)年

昭和化学工業株の設立とともに、塩谷組は同社の運送および土建工事の専属業者となった。その2年後の1939(昭和14)年8月、旭硝子株が昭和化学工業株を吸収合併し、同社所有の土地・機械設備などを譲受して伊保工場(現 高砂工場)とした。以後、同工場では同年12月に耐火レンガ、1943(昭和18)年には有機ガラスの製造を開始した。塩谷組は同工場の専属業者として事業拡大に寄与し、着々とパートナーとしての礎を築いていった。しかし1939(昭和14)年9月に第二次世界大戦が勃発、1941(昭和16)年12月には遂に太平洋戦争に突入するに至り、戦時色の深まりとともに事業の継続はしだいに困難になっていった。



有機ガラス製品